



パイプ

又々パイプのけむり

パイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむり

パイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむり

團 伊 玖 磨

パイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむり

朝日新聞社

パイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむり

だん いくま
團 伊玖磨

大正13年4月7日東京生れ。昭和20年東京音楽学校（芸大）作曲科卒業。以後作曲ならびに自作の演奏に従事。昭和41年日本芸術院賞受賞。「パイプのけむり」「続パイプのけむり」で第19回読売文学賞（随筆・紀行）受賞。
作品 歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」「楊貴妃」他，交響曲5曲他，歌曲，劇音楽等作品多し。

著書 「朝の国・夜の国」「不心得12楽章」「エスカルゴの歌」「パイプのけむり」「続パイプのけむり」「続々パイプのけむり」「かんがえいしょん・たいむ」「又・パイプのけむり」。

又々・パイプのけむり

昭和45年12月15日 第1刷発行
昭和46年1月20日 第2刷発行

定価 500円

著者 團 伊玖磨

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 東京 名古屋
大阪 北九州 朝日新聞社

又々
パイプのけむり

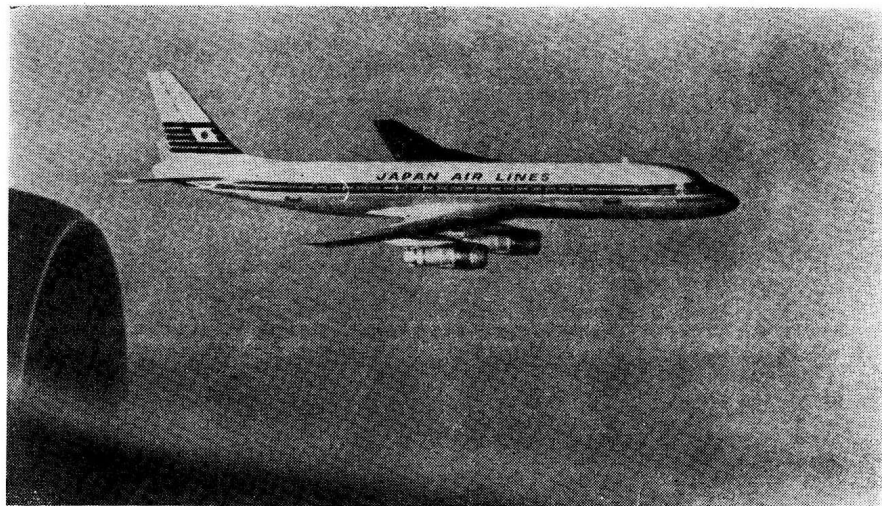
も
く
じ

泡風呂	通脱木	日本橋横山町	朝	送り假名	ててんくん	室内情景	文房具	八十八夜	空の青											
79	74	62	55	51	41	27	22	14	5											
天鷲絨毛蕊花	昇天	清嫩毒蛇湯	アンケート	チクロ	日本料理	チャンチ	大泡立草	旅路	家	ごっこ	コレクシヨン	脚線美								
182	164	154	150	145	137	125	117	109	102	93	89	84								

風呂敷	191	時の谷間	257
雪の朝	196	ハサミキル	262
団体旅行	200	主人	271
カボック	205	めじな釣り	276
突発異変	213	電話料金	286
着生蘭	221	通	294
南半球	228	ジョセフイーン	298
猫股	234	チャンチその後	307
韃靼風生肉	239		
蛇と米	246	あとがき	313

題字・岡島 伴郎
写真・朝日新聞社

空の青



44・5・9-16

汽車には汽車の旅情があり、船には船の旅情があるように、飛行機には又飛行機独特の旅情があつて、そのびかびか光つたような、それでいて一寸^{けだ}気怠いような旅情を僕は大好きだ。そうだから飛行機に沢山乗るのか、飛行機に沢山乗るものだから飛行機独特の旅情を感じ始めたのか、まあ、恐らくその双方がきんこんきんこんと反響し合つて、僕に空の旅を好きにさせているのだと思う。

一寸用があつたので、十日間ばかりを印度支那半島

の旅に出て、帰りに香港に寄った。別に香港に用があった訳では無いのだが、飛行機が香港を経由するものだから、折角香港に着陸するなら、疲れてもいる事だし、好きな街で降りて、好きな店で中華料理を食べて、好きなホテルで一泊して、頭の中で旅の印象の整理をしてぐっすりと眠り、翌日東京に帰ろうと思ったのである。

何時も東京の方から行くとき暑く感じられる香港も、炎熱の印度支那からやって来た僕には涼しかった。半ズボン姿の旅装を普通の夏服に変えて、僕は、随分珍らしい事物を見聞した今度の旅のあれこれを反芻しながら、心しみじみと彌敦道のがじゅまるの並木の下を散歩したり、金巴利道で買い物をしたり、行きつけの店で烤鸭子に舌鼓を打ったり、ぐっすり眠ったりして、自分を取り戻すと、翌朝、東京行きの飛行機を待つ間を、啓徳空港の珈琲カウンターに坐っていた。充分に休養をとった僕に、珈琲の香りは爽やかだった。その香りの向うに、びかびかした朝の光の中の滑走路が硝子越しに見えていて、飛び立って行く飛行機や、降りて来る飛行機や、降りて来てからのろのろとタクシングをしている飛行機の、巨大な魚のような姿が窓を横切って行く。珈琲を啜っている僕の周囲には、荷物を持ったたり、持たなかったり、立ったり、坐ったり、歩いたりしている人達が沢山居て、その人達の頭の上を、出発や到着を知らせる各国語のアナウンスが飛び交う。僕は珈琲を楽しみながら、汽車や船と又違った、独特の旅情が此處には一杯立ち昇っていて、この独特の旅情の本質は何なのかしらと考えていると、いきなり、後ろから、ぼんと僕の肩を軽く叩いた人がいる。見ると、良く知った青年がにこにこ笑って立っている。

「やあ、珍らしいね、こんなところでばったり逢ったりして」

「ええ、僕も吃驚びっくりしました。先生はずっとこちらでしたか」

「いや、用があつて印度支那半島を歩いて来て、あんまり疲れたので、昨夜一晚此處で休んで、これから東京に帰るところ」

「そうですか、僕は、兄が此處に駐在しているものですから、春休みを利用して遊びに来て、今から帰るところです」

「日航かい」

「ええ、706便です」

「じゃ、同じ飛行機だ。一緒に帰ろう」

「そうしましょう、そうしましょう」

日航機は、晴れ渡った東支那海の上を飛んでいた。沖繩の島々がブルーの海の上に見える始めた。

「もうすぐ日本だね、きっと桜島の上を飛ぶと思うよ」

「見えるでしょうかね」

「これだけ晴れているんだから、きっと見えるだろう」

「楽しみです、先生、一寸失禮します。トイレに行つて来ます」

窓際に坐っていた青年が立ち上がり、青年を通すために、僕も中途半端な恰好で立ち上

がった。

青年が戻って来て、又、会話が戻って来た。

「あのね、飛行機のトイレットは面白いね」

「は」

「今ね、君は TOILET FLUSH と書いてある釦ボタシを押して汚物を流しただろう」

「汚物とは非道いや、ええ、流しましたよ」

「不思議な事なのだが、その時出て来る水ね、えらく青い水が出て来たろう」

「ええ、飛行機は何時もそうですね、あれは消毒液でしょうね」

「無論そうだろう。然し、君は、何故あの消毒液が濃紺かを知っているかね」

「さあ、何か薬剤の関係じゃ無いですか」

「そうかも知れんが、僕は、別の考え方をしている」

「ほう」

「僕の理論によるとね、あれはね、保護色なんだよ。保護色」

「保護色と言いますと」

「ま、落ち付いて聞きなさい。これは僕以外誰も知らない秘密の理論なんだから」

「ほう、そんなに大層な理論のですか」

「そうとも、だから、僕にこの事を教わっても、夢々口外いひなは不可無いけない、他言は無用。僕も、本当は、誰にも教えたく無いと思ってる位なものだ。然し、君には、全く奇遇で同

じ飛行機に乗り合わせた縁で、そつと教えて上げよう。感謝せねば不可無い」

「はいはい。有り難う御座居ます。謹聴致しましょう」

「さて、話を本題に戻す事にするけれども、大体、旅客機のトイレット程奇妙なものはないと思う」

「はあ」

「先ず、狭過ぎると思う」

「はあ」

「君は余り大きくないから、それ程痛痒を感じないかも知れないが、僕位の身体の大きさになると、旅客機の御不浄は、手狭過ぎて、立居振舞も儘ならず、全く不便で仕方が無い。あの手狭な空間に坐つて周囲を眺めると、まるで飛行機の設計者という者は、人知の限りを盡してトイレットを小さくしよう、小さくしようと努力しているらしくて、全く不可解と言う外無い。トイレットに於いて最も重要な便器が先ず可愛らしい程小さくて、僕のお尻などは半分位はみ出してしまふし、顔洗いも小さくて、まるで痰壺たんづぼのようだ。君、京都の御所ひしよの御不浄は二十畳敷きだと言うぞ」

「真逆」

「僕も入つた事は無いから、真偽の程は知らないが、御所ともなれば広かろうと思う。それに較べて飛行機のトイレットは狭過ぎる」

「御所に較べちゃ無理ですよ。何しろ機内という限られた空間に、成る可く沢山の客席を

しつらえ、荷物を積む場所を作り、これで結構苦心しているんですよ。便所が狭い位は仕方が無いでしょう」

「いやいや、そうは行かない。僕の知り合いでね、あんまり太っているためにあの中に入らずに、何時も客席でお漏らしをしているアメリカ人の婆さんがいる」

「へえ、遣り切れんですねえ」

「日本人は兎も角、外国人には矢鱈に太ったのがいるから、案外、この婆さんのような人は多いかも知れず、不潔な事だ」

「大問題ですね」

「そうだ、大問題だ」

「あ、大問題で思い出しましたが、先刻の、旅客機のトイレでざあっと出る水が何故青いかの理由を教えてください」

「ああ、その話か。教え無いても無いが、これは、僕が何十回、いや、百何十回か飛行機に乗って考え付いた理論で、未だ僕その他には誰も気付いていない理論だから、夢々口外しないと約束して呉れなければ教える訳には行かない」

「だから、先刻、約束しました」

「良いかね、此處だけの話しだぞ」

「はいはい」

「あれは消毒液では無い」

「そうでしょうか、消毒液だから青いのじゃ無いかしら」

「いや、あの青い水を見て消毒液だと早合点するのは素人のする事だ」

「へえ」

「確かに消毒液も多少は入っているかも知らんが、それだけの事なら、何も、インクのように青い液にする必要は無い。透明な消毒液もある事だし、真逆大腸菌や淋菌が青い色を見ると吃驚して目を廻す訳でもあるまい」

「はあ」

「あれは、保護色のために青く着色してある訳だ」

「保護色とは又」

「旅客の汚物を何處迄も運んで行くのは飛行機にとって大変だから、飛行機は洋上に出ると、ぱっと尻の瓣を開いて汚物を放出する」

「本当ですか」

「本当だろうと思う。その際、青く着色してある事によって、霧のようになった汚物は青空に溶け込んで、下からの敵艦艇に発見されない」

「敵艦艇とは大袈裟ですわえ」

「ま、敵でなくとも良い、下界の船から見えない訳だ。これが、着色して無いと、黄色の霧を撒く訳だから、すぐ発見されて、黄害とか何とか、近頃の事だから、五月蠅い事にな

る」

「へえ」

「そして、青なら、洋上だから、もっと上空の敵機からも、海の色に溶けて発見されない。これぞ保護色の妙、大したもんだ」

「本当ですかね」

「外国に行つて方々の国の旅客機に乗ると、緑色の液や、桃色のような変な色の液が出るのもあるよ」

「緑色のは何うどいう理由ですか」

「あれは、森や牧場の上で放出するためだ」

「桃色のは」

「夕焼けの時に放つ」

「全く驚きましたなあ、先生は、飛行機の上でそんな事を考えておられるのですか」

「そうさ、飛行機の上は退屈なものだ。そこで、機上でトイレットの水の色の理由を考え続けて十数年、遂にこの理論を得た。だから、この理論は僕しか知らない。従つて誰にも言つては不可無い」

「はい。それにしても驚いたなあ」

青年は、何やら独りでしきりと驚いていて、僕は得意だった。

ベルト着用、そして禁煙のサインが出て、飛行機は羽田空港に安着した。機外は、びか

びかの日本晴れだった。

青年が眩まよしそうに空を見上げて言った。

「素晴らしい青空ですねえ」

「本当に気持良く晴れているね、雲一つ無い」

僕も眩まよしい空を見上げながら答えた。

八十八夜



44・5・23
| 30

新装成った福岡空港ビルの前で拾った小型タクシーは、八女郡の黒木町に向かって、国道三号線を南下していた。五月になったばかりの朝の空が抜けるように晴れ渡っている下に、三号線沿いの紫雲英の咲く平野が広々としていて、その広々の東の果てに、英彦山が美しい姿を浮かべている。

朝、八時十分の一番機で羽田を発って、未だ十時だと言うのに、車はもう既に水城を過